

花と蛇 2 パリ / 静子

2005(平成17)年4月14日鑑賞(東映試写室)

★★★★



監督・脚本=石井隆/原作=団鬼六/緊縛指導=有末剛/ヘアメイク=金森恵、重久聖子(杉本彩担当)/出演=杉本彩/遠藤憲一/宍戸錠/池上小夜子/荒井美恵子(東映ビデオ配給/2005年日本映画/113分)

……ご存知杉本彩の『花と蛇』のパート2が完成。前作(04年)のインパクトが強かっただけに、二番煎じでは……と心配も。しかし、それは全くの杞憂! 舞台をパリに移して、ホンモノの絵を描きたいとの思いに燃える若い画家との絡みがポイント。その思いは、当然、静子の肉体に……。オークシオンシーンの刺激性(?)は前作と同じだが、ストーリー性はこちらのほうが断然豊か。そして、杉本彩のSM度は……?

第5章

こっちもお得意
オッチな映画

待ちに待った(?)第2弾!

ご存知、杉本彩の『花と蛇』パート2が完成した。スタッフに多少の変更はあるものの、原作と監督・脚本は当然同じだし、この映画特有のスタッフである緊縛指導やヘアメイク等も全く同じスタッフ。そりゃ誰でもがスタッフとして参加できる映画ではないことはたしか……。前作での杉本彩の文字どおりの体当たり熱演は、キネマ旬報2004年3月下旬号で秋本鉄次氏が絶賛したもの(『シネマルーム4』156頁参照)。そしてこのインパクトが強かっただけに、二番煎じでは、とも心配されたが……。また、この手の映画(?)は「刺激」が最大のポイントだから、見慣れてくると刺激が薄れていく運命にある。さて、そんな宿命的なハードルをこのパート2は超えることができたのだろうか?

遠山静子の夫は?

前作では、主人公の夫は若き大富豪の実業家である遠山隆義(野村宏伸)。そ

してこの2人の間の冷えた夫婦仲がストーリー展開の前提をつくっていた。しかし、パート2では静子の夫、遠山隆義を演じるのは、かつての日活の青春スターであったエースのジョーこと宍戸錠。彼は画商で美術評論家だ。静子は大きく歳の離れた夫を愛してはいるものの、性的不能（に近い状態）の遠山隆義は……？

ポイントは2人の老人……？

この映画のストーリー構成上ポイントとなるのは、2人の老人……？ その1人は静子の夫の遠山隆義だが、もう1人は著名な画家。せっかく杉本彩のSM映画を観にきたのに、映画の冒頭に登場するのは、この2人の老人のエロ会話（？）と残り少ない人生談議。早く本筋に！と思うのはやまやまだが、この会話がパート2のストーリー構成に大きな影響力をもっているため、ここはじっと我慢が必要……？

舞台はパリ！

前作は日本のヤクザやヤミの権力を牛耳る男たちが次々と登場し、秘密の仮面パーティーの舞台も日本だったが、パート2は秘密パーティーとか秘密オークションのイメージが多分、世界中で最もよく似合うパリ……？ それもパリ郊外にある立派な古城。そのイメージは、あのニコール・キッドマンとトム・クルーズが主演した『アイズ ワイド シャット』（99年）に登場する古城と全く同じ。

静子がパリに来たのは、夫の仕事上の依頼によるもの。すなわち、遠山隆義がその才能を見込んだ若き画学生、池上亮輔（遠藤憲一）への援助を今後も続ける価値があるかどうかを静子に見極めさせるためだった。そんな「任務」を背負った静子は1人、池上亮輔の部屋に乗り込んでいったが……？

若き画学生の生活とその才能は？

静子が入った池上亮輔が住むアパートの部屋には、油絵の道具はあるものの、完成品は全くなし。しかも、今描いている妹、不二子（池上小夜子）のヌードも、「本当に描きたいものではない」とわめきながら、キャンバスにナイフをつきつけているありさま。まあ、画家を目指す青年なんて、そうそう普通の生活をして

いないのは当然かもしれないが、この亮輔の暴れようは相当なもの。しかし、不二子が帰った後、亮輔は静子の姿をみて、「あんたなら新しい絵が描けそうな気がする」「いや、描きたいんだ！」と暴力的行為に及んだり(?)、懇願したり……? 亮輔が静子をモデルにして描きたいというのは、いわゆる SM 風の絵。こんな池上亮輔に、ホントに画家としての才能があるのだろうか?

微妙に揺れ動く女心も……?

杉本彩による体当たり熱演が『花と蛇』の最大の特徴だが、パート2では杉本彩は亮輔からのさまざまな要求を拒否したり、懇願に戸惑いながらも、最後にはそれを受け入れてしまう微妙な女心をうまく表現している。そしてそのことが、パート2のストーリー性を強めているのだが、別の視点からは、それは適当でいいから早く本来のシーンに行けよ、と思う面も……? 若き画学生であるはずの亮輔は、なぜか SM 流の縛りのテクニック(?)も得意。ベッドの下の引き出しには、しっかりとそのためのロープも。後半登場するオークションのシーンでは、SM 縛りの専門家が登場するのは当然だが、なぜ亮輔がこんな技術を身につけているのかは???

まあ、そんな詮索をしても仕方がないことだし、真贋判定のクライマックスシーンまで盛りあげていくためには、必然的にたどらなければならないストーリーだと納得しよう……。

ハイライトはやはりオークションの舞台

前作も SM ショー(?)のハイライトはオークションだったが、それは今回も同じ。今回は、絵が大事な小道具として使われているため、オークションでのテーマは、絵の真贋の判定となった。さてその真贋をどうやって判定するのだろうか? それは……?

オークションのシーンだから、登場人物を1人に限らなくてもよいのは当然のこと。したがって、ここでは、とことん観客の目にさらされる静子の他、オークションの女、貴子(荒井美恵子)や自らの策略に罪の意識にさいなまれた不二子も……。『ハナヘビ』が今後第3作、第4作とシリーズ化されるとしても、オー

クションのシーンはきっと不可欠だろうし、それがハイライトシーンになることは変わらないはず……？

専門用語も勉強しよう！

当然このパート2も、団鬼六の原作にもとづくもの。そして団鬼六はSM小説の巨匠。だから、その世界のことは何でも知っているはず。そんな知識の一端を観客に勉強させるシーンが、この映画には2カ所ある。後半のオークションシーンでの「剥き海老ころがし」と「ぶっちがいの図」がメインの専門用語だが、冒頭にも、古くさい本から学ぶ面白い(?) SMの世界があるので注目！ それは、「細かい文字が読みづらい」などと弁解しながら、夫の隆義が妻の静子にSM小説を声を出して読ませるシーン。夫に頼まれたため、工作上必要と思って淡々と文字を声に出して読んでいる静子だが、その妄想するものはスクリーンに登場してくる妖しい姿を観ている観客と同じ。せっかくSM映画を観るのなら、それなりの専門用語も勉強しなくては……？

高尚・難解な(?) SM哲学論議は……？

パンフレットには、普通の映画のパンフレットでは考えられないような写真の他、解説文の中にはさまざまな過激な言葉や表現が……。そして「日本にかつていなかった女優です」と題した東京スポーツ、山西守氏の論文(?) も短いものながら、その行間に込められているメッセージはかなり高尚かつ難解なもの……？ SM談議なんて恥ずかしいとか、イヤらしいとか言わないで、居酒屋で酒を酌みかわしながら堂々とSM談議を展開してみても……？ それに乗ってくる同好の士(?) が、ひょっとしているかも……？

2005(平成17)年4月15日記